音楽・舞台

即興の化学反応 生んだ自由さ

真心ブラザーズ、3年ぶり新作

真心ブラザーズ（YO-KING、桜井秀俊）が、約3年ぶりのニューアルバム「FLOW ON THE CLOUD」を発表した。「事前の準備のしなさっぷりがすごかった」と振り返る桜井。レコーディング現場では、他のミュージシャンたちとともに、準備もほどほどに大喜利のごとく即興を応酬。化学反応を次々と起こす形で曲を生み出したという。

録音のためにスタジオに集まっても、曲の最終イメージは共有できていない。YO-KINGが手がけた曲に至っては、スタジオで初めてコード進行をメンバーに伝え、周囲が音合わせをしている間に、2番の歌詞を考えるといった具合だった。重視したのは、個々のミュージシャンの現場でのひらめきだという。「曲が誕生するダイナミズムを体験するのが好きなんです」とYO-KINGは語る。

そんな状況だったからか、作品は全編自由な空気が漂っている。例えば1曲目の「レコードのぶつぶつ」。YO-KINGが歌う歌詞は、1番と2番で言葉数が異なる自由さ。桜井のギターもそれに呼応するかのごとくたたみかけるように弾き倒す。少数精鋭のバンド編成で、シンプルでいい意味で肩の力が抜けたロックが終始展開する。

「追い詰められた中でやったから面白い。家でじっくり考えていたらできない火事場のクソ力が出た感じ。曲によっては、どうやってギターを弾いたのかわからず、再現できません」と桜井は笑う。

ドラムとベースはここ数年のツアーで共演するミュージシャン。「4人の呼吸や、ミュージシャンとしてのスキルが、がっちりかみ合ったからこそできた作品だ」（桜井）とも。さらに今作では、YO-KINGの発案で、モノラル録音を採用。シンプルな楽器編成ゆえ、音が一つの塊となって聴き手に迫る効果が生まれている。

そうやって出来上がった自信作だが、YO-KINGは「これが完成ではない。ライブでやればやるほど変わっていくだろう」と言う。アルバムは、発展可能性を残した「超初期の最高の瞬間を凝縮」（桜井）したということだ。

2人は新作をひっさげ、10月に全国ツアーをスタート。今月も東京（5日）や名古屋（17日）公演が控える。

楽曲はどのような成長を果たしているのだろうか。（河村能宏）

YO-KING（左）と桜井秀俊

「ライブでやればやるほど変わる」

街が個性持ち、オケに地方色を

井上道義、地方の活動に区切りへ

指揮者の井上道義が、オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）の音楽監督を来年3月で退任する。今年3月には大阪フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者も退いた。区切りをつけつつある地方での活動をどう感じているのか。

「やりたいことはできたし、おもしろかった」。2007年に音楽監督に就いたOEKでの日々をそう振り返る。小編成ならではの発見があったという。

「モーツァルトは、できたてのほやほやのような音になる。シューベルトの交響曲『ザ・グレート』は、第1バイオリン8人でもできる。ベートーベンの『田園』は、OEK以外とはもう演奏する気がしない」

設立当初からいる外国人団員は、今も38人中10人を占める。「文化的には常にぶつかりあう。そこに生まれる疑いや気づきを忘れたら、文化は前に進めない」

多角的に可能性を広げようとした。邦楽とコラボを重ね、全国の劇場やホールが共同制作したオペラ「フィガロの結婚」では、演出の野田秀樹とタッグを組んだ。音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」の金沢誘致にも尽力した。

小規模編成に適したバロック音楽に力を入れるべきだと考えたが、客層の薄さという地方ゆえの課題が立ちはだかった。古楽の奏法は避けて通れないが、「食いつくお客さんはそういない。集客を考えると演目は（有名な）ヘンデルの『水上の音楽』になっちゃう」。

「オーケストラは街のミニチュア」が持論だ。それだけに、「地方色を出すなら街自体が個性を持たないと」と注文する。金沢に限らず、地方楽団の意識が気にかかるという。「規範や考え方がその街のスタンダードで終わっている。競争が少ないんだろうね。動画サイトで最新の情報が手に入り、お客さんが持つ情報量は東京と地方とで変わらないことに気づかない古いメンバーもいる」

地域の伝統をふまえ変化に対応する、「文化の地産地消ができる人材」を切望している。（星野学）

感情と歌が揺さぶる永遠の愛

ユーミン音楽劇「朝陽の中で微笑んで」

歌う松任谷由実（手前）＝東京・日比谷の帝国劇場

歌う松任谷由実、演じる俳優陣が交差し融合を目指す舞台「朝陽の中で微笑んで」（松任谷正隆脚本・演出）が、東京・帝国劇場で上演中だ。未来の愛の姿を淡い希望をまぶして描き、見えない「永遠の愛」を信じられる者の心の鐘を打つ。

2517年。50代の肇（寺脇康文）が死別した恋人恵美に似た紗良（宮澤佐江）に出会う。紗良は実は恵美のクローンだった。生み出した大崎医師（六平直政）、依頼した肇、紗良に捜査の手が伸びる。永遠の愛を誓うも引き裂かれていく肇と紗良。オムニバス的構成で、14の歌が各場面を導き、溶け込む。「ユーミン音楽劇」の3作目だ。

愛の形は「恋人同士」「父娘」「母息子」という三つの集合のベン図を描き、すべてが交わる位置にユーミンがいる。愛する女性、娘、母は、いわばユーミンの分身で、分身らの感情に歌声が、歌声に分身らが揺さぶられる。歌にセリフや動作がかぶる。過去作に比べ、歌と演技の有機的連関が著しい。

作家カズオ・イシグロの「わたしを離さないで」も想起させ、紗良は絶望的存在であるだけに、宮澤のひたむきな姿は哀感を誘う。寺脇は、2度の別れの苦しみにのたうつ。大崎の娘役の水上京香らのセリフに、臓腑からしぼり出されるような〝愛の吐血〟が垣間見られる。

最高潮を迎えるタイトル曲の場面。ユーミンは巫女か女仏的なたたずまいで、大ぶりの蓮花装置（美術は松井るみ）に包まれ、あたかも慈しみに満ちた〝ゴッドマザー〟だ。歌声はここに来て、ドラマ全体の感情を天界から物語るかのように、深く熱く、今までにない境地を示す。

盛り込まれた多量な要素、前半のテンポなど、各面で注文は出せるかもしれない。だが、舞台は、目に映るすべてのものだけでなく、目に映らぬものもメッセージとして伝え、感動のさざ波を小やみなく送り込んでくる。20日まで。（米原範彦）

50年の軌跡 日米の音楽仲間と

作曲家・村井邦彦、15日にコンサート

「翼をください」「虹と雪のバラード」などで知られる作曲家の村井邦彦が今年、活動50周年を迎えた。15日に東京・渋谷のBunkamuraオーチャードホールで、記念コンサート「LA meets TOKYO」を開く。米ロサンゼルスに拠点を移して四半世紀。「LAの音楽友だちと日本の音楽友だちを招いた演奏会。懐メロにせず、今の村井邦彦を聴いてほしい」と語る。

1967年、「待ちくたびれた日曜日」で作曲家デビューした村井。グループサウンズブームの折に作った初期代表曲「エメラルドの伝説」でホルンやオーボエを加えてストリングス編曲を施したように「僕は常にオーケストラの音に興味があった」という。

そう語る通り、公演では、トニー・ベネットとレディー・ガガの公演の指揮を執るなど名編曲家で知られるホルヘ・カランドレリ、映画「ハドソン川の奇跡」の音楽を担当した作曲家クリスチャン・ジャコブらを招き、「大編成のシンフォニーオーケストラを行う」と意気込む。

構成は多彩だ。2013年に上演され、音楽を担当した音楽劇「アルセーヌ・ルパン カリオストロ伯爵夫人」をフルオーケストラで披露するほか、「67年から書き始めた日本のヒットソングのメドレーも行う」。50年の活動を公演に凝縮させる。

日本からは小坂忠、吉田美奈子ら旧友に加え、生田絵梨花、海宝直人、三浦一馬らも参加。村井の活動の軌跡を華やかに彩る。

「公演の3分の2は、この25年間にLAで書いた曲になる。前向きな感じを出していきたい」

午後6時半開演。1万2千円。03・5720・9999（ホット・スタッフ・プロモーション）。（河村能宏）

評

鈴木優人指揮BCJ「ポッペアの戴冠」

バロック歌いが思い一つに

池上直哉氏撮影

愛さえあれば、妻を捨て、人妻を横取りするのも許される。およそ理不尽な筋書きのオペラの最右翼「ポッペアの戴冠」が、モンテヴェルディ生誕450年記念の掉尾を飾った。演奏は鈴木優人指揮のバッハ・コレギウム・ジャパンである（11月23日、東京オペラシティコンサートホール）。

理不尽を支えるのは皇帝ネローネの権力ではなく、まずは音楽の力。モンテヴェルディと周辺の作曲家たちの合作とはいえ、傲慢も苦悩も策謀も、そしてなによりも愛が、すべて淀みなく続く豊かな楽想と、練達の感情表現で塗布され、その心地よさが、道徳なんてなにさという気分にさせる。そのおぞましくも美しすぎる音楽の破壊力の前では、賢者セネカの説得もいっさい歯が立たず、ただ呑まれるのみ。

並の力量ではこの音楽に太刀打ちできまい。ネローネには美麗ななかに毅然とした歌唱のレイチェル・ニコルズ、ポッペアには純白さで悪を骨抜きにする、とろけるような歌を披露した森麻季、深い声にセネカの皮肉も受苦もまるごと歌い込めたディングル・ヤンデル、燃えあがる情念のなかに憐れさの透かし見えるオッターヴィアを好演した波多野睦美ほか、筋金入りのバロック歌いの面々が、思いをひとつにして上演に参加している様子が、目にも耳にも肌にも感じられた。ひとり異なる声作りだったアモーレの小林沙羅も、異分子役にはふさわしかろう。

管弦に加え、チェンバロ2台にオルガン、レガール、ハープ等々の器楽部分は、いかにもバッハ・コレギウムが17世紀音楽を演奏したらこうなるという正統派。うまくて趣味もよくてまったく不満はないが、近年のバロック・オペラ上演にさかんな、リズムや音色のより過激なデフォルメも、遊び心としてちょっとは聴いてみたかった。（長木誠司・音楽評論家）

評

田島貴男

一人で挑むバンドサウンド

工藤ちひろ氏撮影

オリジナル・ラブの田島貴男が、バンド編成ではなく個人活動として続けている恒例のワンマンパフォーマンス「ひとりソウル」。いわゆる生ギターによる弾き語りとは一味違う。サンプリングやリズムボックス、映像との同期なども絡め、たった一人でバンドサウンドに挑むユニークな試みだ。10月半ばから続いた「ひとりソウルツアー2017」最終日（11月26日）を、東京・渋谷のTSUTAYA O-EASTで見た。

一人多重コーラスによる「ひとりソウルショウのテーマ」で幕開け。音声だけでなく本人×5人の映像まで駆使したサービス精神に場内が沸く。無造作に床に置かれたギターと機材のほか広い舞台上には何もない。けれど、そんな簡素なセッティングの下、田島がたった一人で繰り出す豊潤な音像はまぎれもなくバンドサウンドだった。

ブルース編、ジャズ編、ロックンロール編の3部構成。自作曲を中心に全23曲、それらルーツ色濃い音楽スタイルで再構築しつつ披露した。大ヒット「接吻」をジャジーで成熟したコード解釈でより一層官能的に表現したり、「朝日のあたる道」が内包するブルース味をくっきり浮き彫りにしたり、スタンダード曲「ムーンライト・セレナーデ」を田島流に昇華してみたり。全編、一人でひたすら歌い、弾き、床を踏み鳴らし、時に自らの胸や頬までを打楽器がわりにたたき、躍動した。

印象的だったのはジャズへの接近具合だ。40代半ばを過ぎ、初めて正式にジャズギターを学び始めたという飽くなき好奇心と努力は確実に今回のステージにも反映されていた。過去の曲も新曲もすべて現在進行形で磨き上げてゆく。もはや「ひとりソウル」はサイドプロジェクトの域を越え、田島を加速させる燃料炉的な存在となった。（能地祐子・音楽評論家）

右からケラス、ファウスト、メルニコフ

「新しい体験 常に聴衆と共有」

室内楽でピアノ×バイオリン×チェロ

室内楽の基本はカルテット、つまり弦楽四重奏だ。高音で歌い交わすバイオリン2台、要のビオラ、低音を支えるチェロ。オーケストラの基本の編成も、このバランスの延長上にある。その意味で、ピアノを含むトリオというものは、音色の面でも音量の面でも実に不安定だ。脚が1本ない椅子のように、ちょっとしたことで一気に崩壊する。

しかしこの3人は、その不安定さをむしろスリリングに乗りこなし、挑戦の礎にする。バイオリンのイザベル・ファウスト、チェロのジャンギアン・ケラス、ピアノのアレクサンドル・メルニコフ。いずれもソリストとして世界を駆け回る名手だが、今年は2月と10月、2回もそろって来日し、ベートーベンやシューベルトなどの古典の懐で存分に跳ねた。シューマン作品にとことん挑む3部作のCDも昨年完結した。

「この2人とやっていると、不思議と不安を感じない」（メルニコフ）「みんな、互いの音に興味津々だからでしょう。合わせようと思う前に楽しんじゃってる感じ」（ファウスト）

先導する人も、そのつど弾力的に変わる。ケラスは言う。「コンサートで2日続けて同じ曲をやる時も、『昨日と同じように』なんて絶対考えず、一回一回新しい目と耳を持つことにしている。演奏家のエゴかもしれないけど、完璧な演奏より、聴衆と新しい体験を常に共有する方を僕らは大切にしているんです」（編集委員・吉田純子）